

## 「紀州犬と熊楠とニホンオオカミ」

志村真幸（慶應義塾大学非常勤講師）

### 【はじめに】

#### 紀州犬

日本犬の一種

1934年 国の天然記念物に指定

昭和初期に秋田犬、甲斐犬、越の犬、柴犬、四国犬、北海道犬とともに指定

もともと和歌山・三重・奈良の県境付近に分布していた在来の犬

現在は紀州犬の危機

2016年 ジャパンケネルクラブ（JKC）の登録犬数：1頭

日本最大の犬の管理団体

\*登録は仔犬のときに一回だけ受けるもの

2016年末 紀州犬保存会が活動を停止

### 【1. 紀州犬】

#### 熊楠の紀州犬への関心

紀州犬を飼っていたかは不明

地元の犬であり、いろいろと見聞きする機会が多い

1910年10月3日『牟婁新報』掲載の「財産分けの話」

「予も『人類学雑誌』（今年七月十八日発行）で、御嶽、玉置山等で、狼を符に画きて盗火を禦ぎ、また狼を祭りながら社畔の大杉を「犬吠杉」と名づくるなどより推して、古えわが邦固有の犬は狼種より出でたるを立証した。縁が近ければこそ、明治十三年ころ、日方近所で狼と犬と交合したことがある。仏国のブッフオン大先生は、犬と狼を交ませ間種を得た、と自記しある。これらは学術上非常に必要なことで、決して風俗壊乱じゃない。現に、九年前に熊野勝浦で太地犬というを見た。これは狼を畜うて犬となったのじゃ。近ごろははなはだ少ない、獵犬に第一じゃ、と老人が惜しみおった。インド辺で野牛を畜うて数代の後また野牛と交らせねば必ず絶える。太地犬も狼が少なくなつて狼と交ることならぬから、絶滅に近づいたんだらう。ただし、予は犬と狼の交むところなど決して見たくない。ただ本邦でせつかく古人が作り上げし好獵犬種の絶滅を哀しむのみ、と断言し置く」

#### 太地犬

太地町周辺でイノシシ狩りに使われていた獵犬

ほかにも紀州地域には多様な在来犬が存在

熊野犬、高野犬、明神犬、那智犬、色川犬、日高犬、大内山犬など

これらが日本犬保存会（なかでも石原謙）によって「紀州犬」としてまとめられて品種化

\*毛色や体格はさまざま。現在では白いのがすなわち紀州犬というイメージがあるが

猪犬、鹿犬、兎犬

麻、ヌタ毛、白、茶、赤、胡麻毛、黒胡麻、赤ヌタ、胡麻、薄赤、純白、赤茶、栗

田辺付近でも飼育

日本犬保存会の岩橋恒二の「紀州日本犬調査記」(1933年)

「西牟婁郡の有名なる猪鹿猟場である秋津川を見聞すべき田辺より秋津川に沿って逆上る……」  
奇絶峡、上秋津村杉原など

しかし、熊楠の頃には衰退

熊楠の考え

太地犬はオオカミと交雑をくりかえしてきた

優秀な猟犬であるのは、オオカミの血が入っているから

しかし、オオカミの減少により交雑できなくなり、優秀さが失われ、絶滅に近づいた

ニホンオオカミは1905年に奈良県南部で捕獲されたのが最後の個体

以後、確実な生きた個体は確認されていない

絶滅

ただし、太地犬の衰退の原因は実際には

・明治維新以降の洋犬の導入

より優秀な猟犬である洋犬、洋犬と在来犬との雑種化の進行

とくに猟師は優秀さに重点を置き、「国産」かは軽視する傾向

・他地域の犬との交雑・交換

・愛犬趣味の広がり

藤田邦一郎「紀州熊野犬に就いて」(1978年)での回顧

「紀州犬の仔は安価にて阪神地方に売られ、紀州の地は紀州犬絶滅の機運に瀕する」

都市部でペットとして飼われる

・現在の研究では、ニホンオオカミと紀州犬は遺伝的に混じっていないとされる

## 【2. ニホンオオカミ】

熊楠が生きたオオカミを眼にしたことはあったのか

おそらくない

「千疋狼」(1930年)

「幼時、和歌山市の小学校で、休憩時間にしばしば同級生どもから千疋狼の譚を聴いた」

千疋狼(狼梯):木の上に逃げた人間を襲うため、オオカミが積み重なってはしご状になる

「予二十七年前、紀州那智より高田へ越える途中で狼の糞を見出だし、驚いて引き還した。また二十年前、坂泰官林より丹生川へ下る路上、狼糞にベオミケス属の地衣が生えたのを拾い、今に保存しある。そのころ予が泊った山小屋へ、狼に送られて逃げ入った樵夫二人あった」

糞を見て驚いたのは那智隠棲期

地衣が生えたのを拾ったのと、木樵の事件は絶滅後のできごと

ほかにも、オオカミ/犬研究家の平岩米吉への手紙でも昭和初期まで生存と主張

1935年9月20日付

「狼といふもの明治四十三年迄此の西牟婁郡の一部の深山に生き居しことは小生自らよく存知居るも近年は一向に見聞せず、漸く二疋たけ大和国境の山中に住むことは、五年前毎度其辺に往復する木挽き業の人より聞及びしも、現時のことは分らず」

\*ただし、伝聞

どうということなのか?

熊楠の犬の祖先への関心

「本邦における動物崇拜」（1910年）の「狼」の項

「家犬の祖先が狼またジャッカルより出でたるは、学者間すでに定論あり。熊野で獵犬として珍重さるる太地犬という種は、もと狼を畜ってできしと言い伝う。往年予在英の時、故ハックスレー氏の講話に、人間将来多望の由を述べるとて、牧畜の大阻害者たる狼を畜うて、これに大利益ある牧羊犬を化成せる、人間の忍耐を賞賛せるを聴けり。されば玉置山に犬吠の杉あるも、実は狼吼の杉の意にて、太古犬狼いまだ分立せざりし時の薫習を存する名なるべく、御嶽の札守に狼を画いて盗火を禦ぐとするも、その基因なきにあらじ。予は動物学には暗けれども、毎度山民に質すに、本邦の狼に、本種の他に山犬と称する亜種あるものごとし。日本犬はこれよりや分かれつらん」  
欧米の研究に、日本の例を示すという熊楠のお決まりの論法

\*オオカミと山犬を区別。詳細は不明。日本に2種のオオカミがいたとの説を受けたものか

世界的に犬の祖先への関心

オオカミ説、ジャッカル説、両者の交雑説、野生犬説など

19世紀～20世紀初頭：家畜の改良と品種化が急激に進んだ時期

熊楠の関心もそこから派生（飼っている犬を撫でながら考えたのかもしれないが）

当時の日本

人種・文化における西洋化／雑種化へのおそれ

体格や科学、文化での劣等感

国際結婚の増加

大正からの日本文化への再評価

### 【3. ニホンオオカミと紀州犬の行方】

<ニホンオオカミ>

平岩宛 1936年9月2日付書簡

「当国と大和の境に今も狼の住む様子、毎度承はる（当地の人木挽き仕事にゆき親を見て来りし也）故、鳥銃の名人同伴九月中に探索に行くべく用意致し居りしも、只今の所小生の頑疾にては到底行き得ざることと存候」

確認に行くつもりはあったが、体調不良のためになかなか

真偽は不明のまま

野犬ではなかったかと思われるが、もしかしたらニホンオオカミが残っていたのかも

<紀州犬>

1934年の天然記念物への指定により、絶滅の危機をまぬがれる

しかし、日本犬保存会によって姿の統一、鑑賞犬化が進行

「日本犬標準」というスタンダードに適合した犬のみが評価される

・紀州犬審査会

1938年10月22日に新宮市、24日に御坊で実施

124頭が天然記念物指定を求めて出願

14頭が合格

筆頭にあげられているのは、東牟婁郡色川村産の剛号（飼主：東牟婁郡下太田村、仲地恭二）

東京や大阪でのドッグショーにもさかんに出陳

都会で愛犬として飼育される紀州犬が激増

- ・第二次大戦期の受難

毛皮の供出、餌の調達困難、非常時に犬を飼っていることは非国民

三重では天然記念物指定の犬のみは供出を免れる

- ・戦後は生き残った少数をもとにもりかえずものの、次第に違和感が表明されるように

1968年 松本翠が、紀伊田辺での「J協会展」の日本犬の審査を担当した感想

「その大半の犬が、私の目には余りにも華麗に過ぎ、感心する前に何か奇異な感に打たれました」

「幾何学的に整えたような犬……規格に当てはめたような犬……私には、これが紀州犬か？ と小首をかしげないではいられませんでした」

- ・1960年代～

日本犬保存会と別方向を目指す愛犬家たちの出現

柄物の復活

- ・猟師たちもたもとをわかっ

紀州猪猟犬保存会の設立

猟技に重きを置いた犬の作出が始められる

現在も「紀州系」の猟犬は全国の猟師に人気

血統書付きの「紀州犬」は衰退

犬種としては滅びつつあるが、犬種の枠をとりはらったかたちで繁栄

そもそも日本犬や紀州犬や犬種といった概念自体が、人間によって押しつけられたもの

熊楠が飼った犬もほとんどは「雑種」

犬の幸せとは何なのか

#### 【参考文献】

- ・石黒直隆「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』65（3），2012年。
- ・石原謙「紀州名犬語り草」『日本犬』3巻3号，1935年。
- ・甲斐崎圭『紀州犬—生き残った名犬の血』光文社，2002年。
- ・「公益法人 NEWS ずさん過ぎる運営で紀州犬保存会の移行認定申請が棄却」『公益・一般法人』931号，2016年。
- ・『J K C五〇年史』ジャパンケネルクラブ，2000年。
- ・志村真幸『日本犬の誕生—純血と選別の日本近代史』勉誠出版，2017年。
- ・——「紀州犬における犬種の「合成」と衰退—日本犬とはなんだったのか」『犬と人間をめぐる思考』池田光穂・大石高典・近藤祉秋編，勉誠出版，2018年発行予定。
- ・『昭和日本犬の検討』犬の研究社，1936年
- ・高久兵四郎『日本犬の飼ひ方』春陽堂，1933年。
- ・『日本犬保存会創立五十周年史』上下，日本犬保存会，1978年。
- ・南方熊楠『南方熊楠全集』全12巻，平凡社，1971-75年。
- ・——『南方熊楠英文論考 [ノーツ アンド クエリーズ] 誌篇』飯倉照平監訳，松居竜五・田村義也・志村真幸・中西須美・南條竹則・前島志保訳，集英社，2014年。
- ・ハリエット・リトヴォ『階級としての動物—ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』三好みゆき訳，国文社，2001年。
- ・『和歌山県史跡名勝天然記念物調査会報告』18輯，1939年。